

宿久庄遺跡発掘調査概要

茨木市教育委員会

は し が き

茨木市には、原始・古代から歴史時代にかけての遺跡が数多く存在し、今回調査した茨木市宿久庄・藤の里一帯に所在する宿久庄遺跡は、市内でももっとも西に位置する埋蔵文化財の包蔵地として知られています。

遺跡の南には西国街道が通っており、街道に面して通称「椿の本陣」として市民の皆さまがたに親しまれている「郡山宿本陣」があります。

周辺は、今なお田畑が多く残っていますが、周辺に国道171号線や名神高速道路茨木インターチェンジ等があり、交通の便の良さ等から今後この地域においても開発行為が予想されるところであります。

本書はそうした開発行為に伴う緊急調査による成果を記したものであり、これによって文化財に対する理解と知識を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護の立場から指導・調査を進めてまいる所存でございますので、多くの方々の一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

茨木市教育委員会

教育長 中平 敏

例 言

1. 本書は、茨木市藤の里における三菱倉庫株式会社の倉庫建設に伴って実施した宿久庄遺跡の発掘調査の概要である。
2. 本調査は、茨木市教育委員会が三菱倉庫株式会社大阪支店の依頼により、茨木市教育委員会事務局文化財調査員宮脇薫（囑託員）を担当者として実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年12月25日から昭和60年2月10日、また整理は昭和60年5月1日から昭和60年9月30日までの間実施した。
4. 調査の実施と概要の作成にあたっては、松島仁・柳沢久義・福井良一・松井利夫・原山雅浩・松井喜志子・片之坂節子・桑原紀子・田中良子・早川博子・大戸井和江・土岐朱美・因千枝子・岡分佐知子諸氏の協力を得た。
5. 本書の執筆及び編集は、宮脇薫が担当した。

目 次

本 文

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の環境	2
第3章	層位と遺物の出土状況	3
第4章	遺構	4
第5章	遺物	7
まとめ		11

図 版

図版 I	調査区位置図
図版 II	周辺の主要遺跡
図版 III	遺構図
図版 IV～VI	遺構
図版 VII～IX	出土遺物

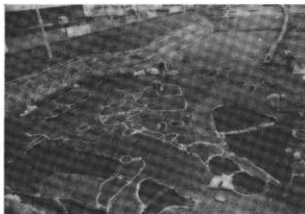
第1章 調査に至る経過

昭和59年6月25日、茨木市藤の里二丁目において三菱倉庫株式会社大阪支店が倉庫の建設を計画されたが、周知の宿久庄遺跡内であるため茨木市教育委員会に埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出された。

これを受けて本市教育委員会が昭和59年12月7日建設予定地内の試掘調査を実施した。

その結果、盛土・旧耕土及び無遺物層の下層に古墳時代の須恵器片及び土師器片を含む黒褐色土層（遺物包含層）を検出したので、発掘調査が必要となり、本市教育委員会と三菱倉庫株式会社の両者間で協議の上発掘調査を実施した。

宿久庄遺跡は、昭和50年に今回の倉庫建設計画の西側にあたる府道茨木～能勢線の拡張工事に伴って行われた発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代の遺物が出土し、付近が埋蔵文化財の包蔵地として知られるようになった。その後幾度かの発掘調査が実施され、宿久庄遺跡が弥生時代から鎌倉～室町時代に及ぶ複合遺跡であることがわかってきた。



調査風景

今回の発掘調査に際しては、三菱倉庫株式会社大阪支店から本市教育委員会に発掘調査依頼が提出され、昭和59年12月25日から昭和60年2月10日まで実施したものである。

第2章 遺跡の環境

宿久庄遺跡は、茨木市の西方、箕面市に隣接する藤の里・宿久庄一帯に所在し、地理的には千里丘陵の北端と老ノ坂山地の南麓に挟まれた狭い谷状のところであり、老ノ坂山地の南麓の低位段丘上に位置している。また勝尾寺川が遺跡の西側を北から南へ大きく蛇行して東へ流れている。

遺跡の南側には旧山陽道である西国街道が東西に通っており、この街道沿いに国の史跡である郡山宿本陣（椿の本陣）がある。

遺跡の北側には全長 100m 以上の前方後円墳である古墳時代前期の紫金山古墳や南塚古墳・青松古墳・海北塚古墳・新屋古墳群等が老ノ坂山地南麓にあり、北摂の一大古墳群を形成している。また北東の山麓には、縄文～中世の集落遺跡である西福井遺跡が所在している。

次の律令時代に入ると、この地域は摂津国島下郡宿久郷内に位置し、式内社である須久久神社が近くに鎮座している。



茨木市周辺の地図

第3章 層位と遺物の出土状況

調査地区の基本層位は、調査地域においてすでに造成されており、盛土が1m 40cm、旧水田に伴う耕土が約35cm、床土にあたる黄色粘土層が20～25cmの厚さで堆積しており、さらに床土の下層には25～35cmのいわゆる包含層である黒褐色土層が堆積している。この黒褐色土層中には、古墳時代後期（6世紀中頃から後半）の須恵器・土師器等の遺物が含まれていたが出土量は少なかった。

包含層の下には、黄褐色礫層の地山（遺構面）が北西から南東へと緩やかに傾斜しながら広がっている。

今回の調査によりこの黄褐色礫層面において検出された遺構は、柱穴・土塼等であった。井戸Ⅰについては耕土面からの検出であり、新しいものであると考えられる。

包含層及び遺構に伴う遺物はいずれも少なく、細片であった。



調査地区の土層

第4章 遺 構

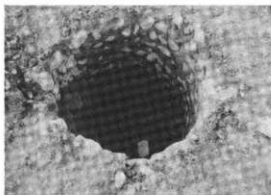
今回の調査により検出された遺構は、掘立柱建物であると考えられる柱穴・土塋及び井戸である。

井戸-I

径4m、掘り方は長径4.5m、短径4m、深さ3.7m。

井戸は少し掘り方が西へよっている。井戸の構造は、川原石を使用した石組み井戸である。

埋土は大部分耕土及び盛土によって埋まり、底近くに黒色粘土がヘドロ状に堆積していた。



井戸-I

出土遺物の中から現代の陶器片が出土している。この井戸の時期は新しく、旧水田に伴う野井戸であったと考えられる。

土塋-I

長辺3m、短辺2m20cm、深さ24cmの方形である。

底面において、柱穴状の遺構も検出されたが、検出時においてはその時期的な前後関係を明確にすることができなかった。

土塋-II

長辺3m、短辺3m、深さ19cmの方形である。

土塋の西半は柱穴によって明確に検出することができなかった。底は二段になって検出された。

土塋-III

長辺2.5m、短辺2m、深さ34cmの方形の土塋である。土塋の北に、長辺2.3m、短辺0.8mの長楕円の土塋が切り込まれている。

土塋-IV

長辺6m70cm、短辺3m、深さ33cm。同時に長径1.9m、短径50cm、深さ27

cm。長辺 2 m 20cm、短辺80cm、深さ41cm。長径 2 m、短径 1.7m、深さ47cmのほぼ円形に近い楕円の土壌。長辺 2 m、短辺50cm、深さ56cmの方形土壌、一辺が80cmの方形の柱穴が検出された。しかし時期の前後関係は不明である。

土壌-V

長径 2 m 10cm、短径 1 m 30cm、深さ16cmのやや楕円形をしたものである。

土壌-VI

長径 1.9m、短径 1.5m、深さ34cmの楕円形をしたものである。

土壌-VII

長径 6 m、短径 3 m 30cm、深さ41cmの楕円形をしたものである。

底面の凹凸が著しくなっているので、その土壌だけでなく数基の土壌を切りあって複雑になっているものと考えられる。

土壌-VIII

長径 2 m 60cm以上、短径 2 m 40cm、深さ67cmのほぼ円形に近い土壌である。

土壌-IX

長辺 4.7m、短辺 1.6m 以上の方形の土壌である。約 $\frac{1}{2}$ の検出である。土壌の北東の方が深くなっている。

土壌-X

長径 2 m 40cm以上、短径 2 m 10cm、深さ24cmの楕円形をした土壌である。底面も複雑になっており、土壌及び柱穴に切りあい関係があると思われる。

土壌-XI

長径 2 m 40cm以上、短径 1 m 70cmの楕円形をした土壌である。底面に柱穴を検出したが時間的な前後関係は明らかでない。

土壌-XII

長径 2 m 30cm、短径 2 m 20cm、深さ51cmのほぼ円形に近い土壌である。

土壌-XIII

検出状態は、ほぼ半円形状で溝状であった。土壌の南半は底面が複雑になっており、数基の土壌の切りあい関係が認められる。また柱穴も数基確認されている。

遺構として上記13基の上層を検出した。土層の検出状態からは、土層・柱穴との切りあい関係もみられる。このことから底面が複雑になっていると考えられる。

出土遺物はいずれも細片である。遺構の性格、用途は不明であるが6世紀中頃から6世紀後半の時期につくられたものであると思われる。

柱穴

柱穴は、形状として円形・方形のものである。大きさは円形のもので径は30cmから80cmまでのものである。方形のものは一辺が1m～1m10cmのものであり、円形のものにくらべると相対的に大きいものである。

柱穴と柱穴とのつながりから掘立柱建物としてとらえることはできなかった。時期としては、6世紀中頃から後半時期のものであろうと考えられる。

土層と柱穴との関係は不明であるが、時期としては6世紀中頃から後半のものである。

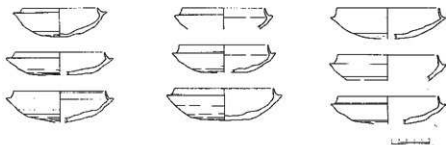
第5章 遺 物

出土した遺物は、須恵器及び上師器である。一部の土壌から出土したものを除いて大半は破片で出土した。

須 恵 器

杯身 (図1. 図版Ⅶ—③~⑫、図版Ⅸ—③~⑧)

杯のたちあがりが高く、内傾しており、端部が丸くおさまっている。体部と底部とをわける稜線がにぶくなっている。大型のものが多い。

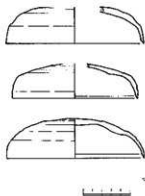


出土遺物 杯身

杯蓋 (図2. 図版Ⅶ—①~③、

図版Ⅸ—①②⑨⑩)

稜線がわずかに残っており、全体的に丸く、甘くにふい感じがする。口縁端部は内傾する面をもっている。

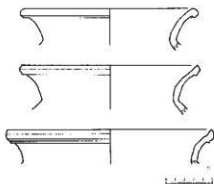


出土遺物 杯蓋

甕 (図3)

口頸部は短く、大きく外反している。端部が丸くおさまられているものが多い。

体部は外面が平行あるいは格子目叩きが施されており、さらにカキ目調整され、内面は青海波の叩き目が施されている。

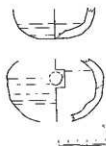


出土遺物 甕

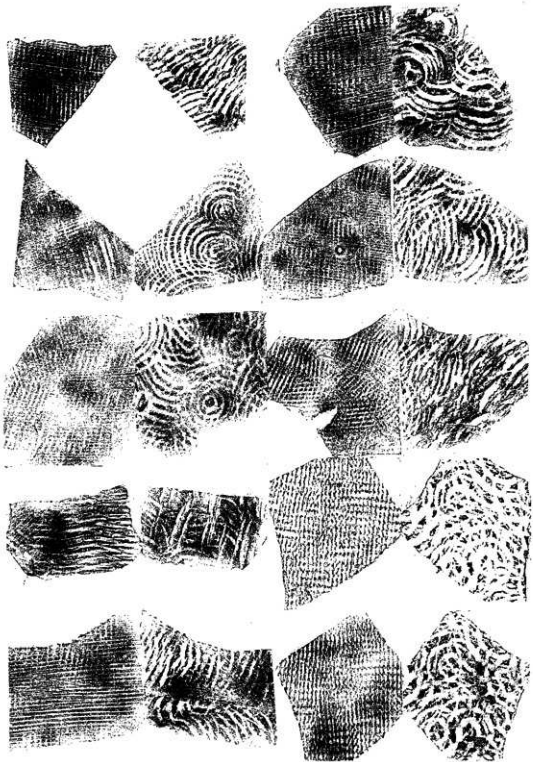
瓦 (図4)

口縁部が出土しておらず、いずれも体部のみである。

以上いずれも陶色古窯跡群Ⅱ期の中頃の位置づけられるものである。



出土遺物 瓦



甕の体部の叩き目文拓影

土師器 (6. 図版Ⅷ-⑬⑭、図版Ⅸ-⑪~⑰)

器種としては甕及びこしきである。

甕の口縁部は大きく外反するものと、あまり外反しないものに分かれ、口縁端部はいずれも丸くおさまられている。外面は密に細かい刷毛目により調整されている。また内面はかるくナデによって調整されている。



こしきあるいは甕とおも

われる角状の把手が多く出土している。口縁部はほぼ直立して、端部が丸くおさまられている。体部の内外面はかるくナデによって調整されている。こしき底面は4~6個の穴が穿っている。

出土遺物 甕



以上が出土した遺物の様子であるが、別に須恵器の生焼けの状態のもので土師器の様相を示すものも若干見られる。器種としては、杯・甕であり、須恵器の形態及び調整の特徴を示している。



出土遺物 紡錘車

ま と め

今回の調査により検出した遺構は、6世紀中～後期にかけての柱穴と土城であった。

柱穴は掘立柱建物のものであると考えられる。明確な時期を設定することは出来なかったが、調査区全域をおおっている包含層からの出土遺物や、柱穴からの出土遺物等から6世紀中～後期のものであると考えられる。

今までに各地で検出されている6世紀中～後期の掘立柱建物の遺跡は、豪族の館あるいは屋敷と関係する遺跡としてとらえられている。また古墳から出土した家形埴輪から、主屋と副屋あるいは倉庫との配置関係が論じられており、最近において6世紀中～後期にかけての掘立柱建物集落の構造が明確になりつつある。

今回の調査地は旧山陽道の成立前の時期であるが、交通の要所にあたる地域にあることから、かなり重要視された建物群であったと考えられる。また調査地区の北側の山麓に所在する前期古墳や後期古墳の在り方から、古墳時代においても重要な位置を占めていた地域と考えられる。

これらのことから古墳の立地との関係と旧山陽道の設定あるいは道の成立と相まって一つの重要な位置になりうる地域であると考えられる。

今回の調査によって検出した掘立柱建物跡の集落と古墳との結びつきは不明であるが、一般集落としては、この時期すなわち6世紀中～後期においては竪穴住居であったと考えられる。今回の調査で竪穴住居跡を検出できなかったことにより、この地域は一般の集落とは様相を異にする集落であったと思われる。

また、律令体制下においては摂津国島下郡宿久郷の地域であり、今回の調査によって宿久郷の6世紀中～後期の様子の一端をうかがうことができ。この地域は、のちの律令時代の里衛の位置である。先述の古墳郡の被葬者との関係は不明であるが、それらの古墳の被葬者と生産を支えてきた人々が共に生産に従事していた地域になるであろうと思われる。

山麓の古墳群とも同一時期にあたることから、それらの古墳の被葬者の支配

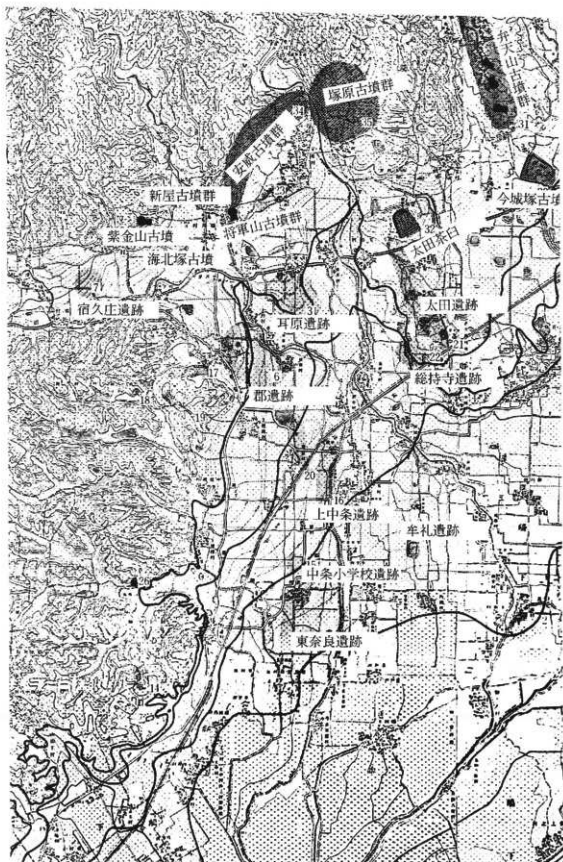
する集落と考えられる地域である。

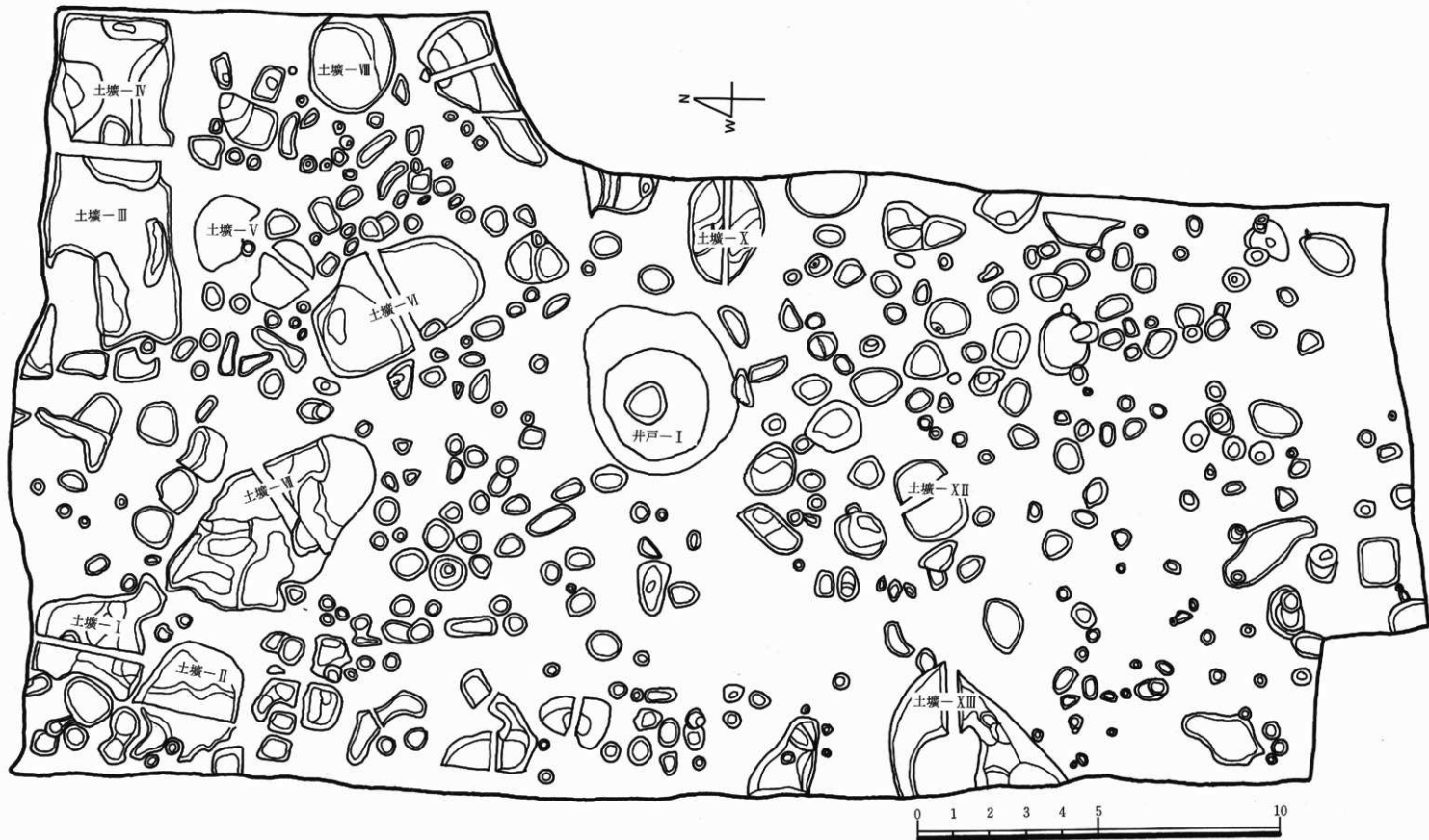
また、6世紀中～後期より以前の時代、以後の時期の様子が不明であるため、それらの古墳との動向とあいまってこの地域の解明が今後の課題の一つである。

今回の調査により検出した柱穴の掘立柱建物跡と土壌との関係は明確にすることは出来なかった。土壌は不整形の状態で検出したものがほとんどである。このことは検出時の様子から、いくつかの土壌と土壌との切りあい関係が認められたことが明確に検出できなかった理由であると考えられる。

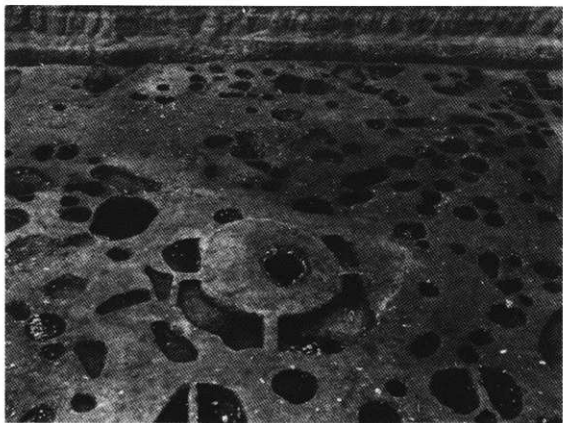
遺物としては、土師器及び須恵器が検出され、器種としては杯・甕等の日常的に集落内で使用されるものであった。古墳あるいは祭祀的な遺構から出土する非日常、あるいは非実用的なものは出土しなかった。高杯の出土も2個体であり、この地域が生活をする集落であることを示すものが出土している。

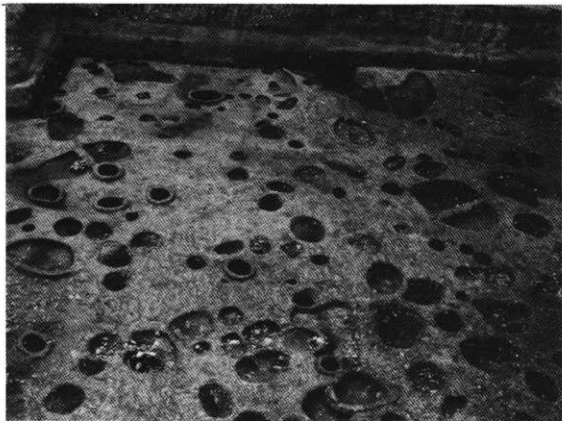
圖 版















①



⑦



②



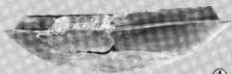
⑧



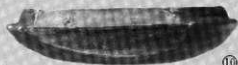
③



⑨



④



⑩



⑤



⑪



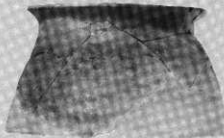
⑥



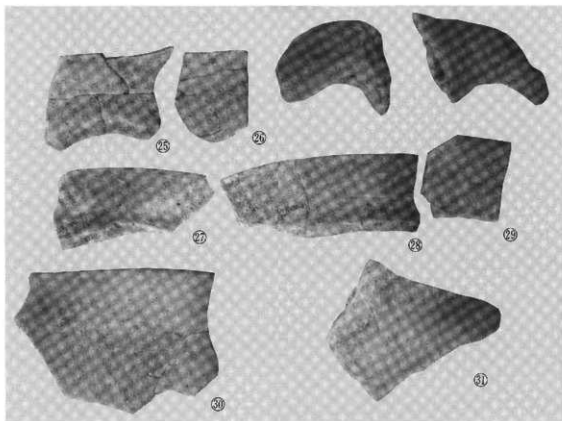
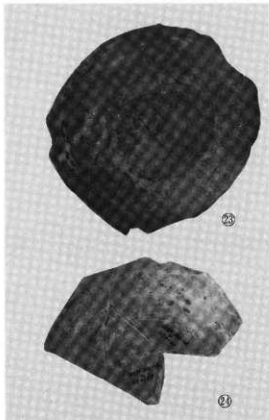
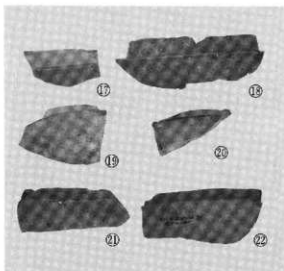
⑫



⑬



⑭



宿久庄遺跡発掘調査概要

昭和61年3月29日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 政和印刷株式会社